

感性の来歴 日本での科学技術受容の思想史から－ The History of Kansei

清水正之 (東京理科大学工学部)

1. はじめに

日本の思想史、心性をフィールドとして倫理学の問題に関わっている者として、思想史的な見取りから、工学的見地の「感性」が今、大きな曲がり角に来ていると感じている。その感覚を歴史的な視点から始めて述べてみたい。

その手がかりとして、日本の西洋科学技術の受容史に触れる。人文社会系にとって歴史は、科学における数学のような意味を持っている。今の日本の感性の来歴・履歴ということを経験を振り返りながら見て置こう。

鉄砲伝来からはじまる西洋技術の受容史のなかで、西洋科学・技術に向かったときの、この国の自己意識がまとまった形で表明されたのは、新井白石(1657-1725)の『西洋紀聞』(「西洋」という語を冠した最初の本)である。鎖国下での布教を目的に密航し鹿児島で捕まったイタリア人宣教師シドッチに対する白石自身の尋問をもとに西欧の諸事情を記述したものである。スリリングで緻密な記述は、当代の儒教知識人新井白石の西洋への関心が奈辺にあるかをうかがわせるが、ここで問題にする記述はキリスト教教義に触れた白石の感想に出てくるものである。

「彼方の学のごときは、たゞその形と器に精しき事を。所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず」(『西洋紀聞』)

(西洋の学問は、ただ形体、事物にくわしいだけだ。いわゆる形而下のものだけを知って、形体をこえた道徳・もの本体(道)などについてはまだ、それに関わるようなことは聞いていない)

これはシドッチのキリスト教の説明を聞いた白石が、神をものを作り出した「工匠」と理解し、その上でシドッチに、では神を作ったのは何者かと問うて、キリスト教の教説に不審を投げかける直後の文章である。シドッチから聞き取った都市ローマの殷賑ぶりを、「其俗機功にして器を制すること、きわめて巧緻」と記述するところなど、白石はコンパスから建築物まで、技術の「形」をなすものに強い関心を寄せる。限られた時間とごとばの壁の中で、政体・国際関係・風俗・習俗を聞き取り理解することの意味

は深い。白石の好奇心はシドッチとの対話を通して様々に刺激されたであろうが、時代の制約、彼の立場からは、西洋学に手を染めることはできなかった。蘭書が解禁されるのは、白石が引退するきっかけとなった吉宗の將軍即位以降である。白石の言葉は、そのままでは歴史に封印されたであろう。

しかし後に、蘭学が興ったとき、その一人大槻玄沢は、新井白石を蘭学の祖とみなす。後世から見ると、単に白石が西洋の事情に通じ得た最初の人であったというだけではない意味をもっていたことになる。江戸後期から幕末の蘭学者たちの西洋科学受容の姿勢は、基本的に新井白石のすでに見取っていた二元論に立ったからである。人口に膾炙するのは、佐久間象山の、「東洋道徳・西洋芸術(技術)」の二つを窮め尽くすことが、君子たる者の喜びの一つだと言う文章であろう。ここで、芸とはART、今の技術をさすことはいうまでもない。ちなみにこの佐久間の言葉に類似した発言は幕末をみるなら、たちどころに何例も挙げることができる。

「器械芸術は彼(西洋)にとれ、仁義礼智は我(東洋)に存す」(橋本左内：医学、安政の大獄で斬罪)

「仁義を致し仁義に死し、西洋器械をとって」大義に死すなら悔いることはない(高野長英：医学、蛮社の獄で自殺)

「堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽くさば、何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ」(横井小楠：思想家、暗殺)等々。

東洋の道徳的骨格を保持しながら、西洋技術を摂取受容しようという幕末の壮大なプロジェクトは、科学技術受容が国策として推進された近代日本のそれにつながる。

2 幕末蘭学者のプロジェクトを支える図式は、以前なら近代化へを成功させた重要な踏石のみ解されてきた。しかしここでは、思想史的な見取りから、この図式に表明された儒教的観念性のトラウマともいえるべきものを指摘することとしたい。発表の中であらためて指摘するが、おそらく白石のいう「形而下」は、白石も看取していた西洋の勃興しつつある市民階級の、生活感的感性を含んでいた

はずである。儒教の徒白石が、東洋の形而上の優位を述べたとき、そうした技術をささえる感性へのまなざしを、ある意味で断ち切り、その意味で観念的な西洋理解になったし、同時に東洋的道德と、生活感覚・感性との回路がたれたともいえる、ということである。白石以来の西洋理解にふれるのは、繰り返すが、近代化がこうして果たせたのだということに力点をおくためではない。むしろ、この図式が、幕末の西洋科学技術受容の図式が、今に至るまでの、感性、工学が関わる感性、我々の感性の来歴に多大のトラウマを残したのではないかということである。

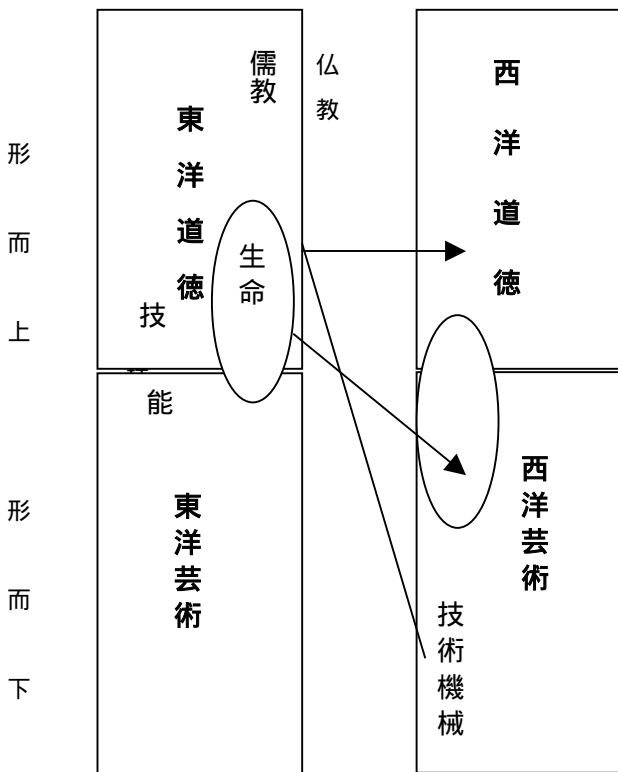


図 西洋受容の図式：文化の型

3 日本の開国は、いうまでもなく、道徳的な変化、社会の仕組みの激変を招く。変化の方向は、形而下の器 = 西洋技術の一層の受容・摂取に国家を挙げて取り組むことであった。福沢諭吉らの開国第二世代は東洋道徳をたちきり、物理（科学）が「心学」（西洋的精神）を作り上げることがを主張する。「西洋の外形の文明」へのみの関心から「形」と「精神（知徳）」が相関している「文明」の摂取を緊急の課題と見るのである（西洋道徳 西洋芸術の複合体）。

福沢は、市民の生活感覚のレベルまでの根底的な変化の必然を説くとともに、その意味で文明化した生活を支えるべき「人民の精神の発達」を企図（『文明論之概略』1875）

している。たとえば『民情一新』（1879）では、「民情」に多大な影響を及ぼしたものとして「蒸気船車、電信、郵便、印刷」をあげ、それらは人民の「交通」（交流）の便の進歩（空間が縮小したこと）だとし、それによる人民の見聞の拡大こそが「インフラメーション」（情報）の意義だと述べているが、これなどは先駆的な意味をもつ。このように、＜理想的に＞すすむなら科学技術は、人民の生活に一層利便をもたらす近代精神を涵養する者であったはずである。福沢の観点は、前世代の西洋受容の図式を精算し、単純化すれば西洋技術と西洋道徳の総体を一元化し自らのものとしようとする主張といえよう。

しかし開国以来の日本での科学技術の受容と進展は、今に至るまで必ずしも福沢の夢見た理想どおりではなかった。殖産興業下の工場労働の問題、足尾銅山事件、黒部電源開発での犠牲者、戦争、戦後の公害、薬害などを思い起こすまでもなく、先端的科学技術は、社会との関係ではジグザグとした歩みを取り、時に生命の毀損さえ生んできた。

こうしたことと、西洋道徳・西洋技術、東洋道徳・東洋技術の順列組み合わせという初期の構想自体の観念性とはある関連をもち、そのこと自体が問題なのだということができるのではないか。福沢風にいえば、西洋的精神は必ずしも実現しなかったし、また、ある種類、ある領域を東洋的慣習のなかに残すこととなった（夏目漱石のいう強迫的神経症的な西洋受容は多くの積み残した領域を残したという風にもいえる）。西洋・東洋という形容詞をとったところに成立するはずの道徳（生活感覚・感性）と連続する技術の一体性はなかなか実現しなかったともいえる。ある「形」体は西洋起源であるというだけで採用され、ある「形」体はこの国の感覚につじつまをあわせて導入されることで問題を今に残したともいえる。

そうした観念性のトラウマは、人文社会系の学問・文化ではそれは見えやすいが、技術史のなかにも明白な証拠があるかどうか、いいきる自信はない。ただつぎのような近代の日本哲学への感想とどこかでつながっているものがあるのではないかと、思っている。カール・レーヴィットというドイツ人哲学者は日本で哲学を教えていた感想として、日本の哲学徒の勤勉さをたたえつつ、しかしかれらが「二階では哲学を考え、一階ではそれまで通りの生活をおくっている」と指摘している。哲学が生活と関わりなく一人の学とのなかにあることの奇妙さを語っている。これを近代日本の学問や研究の観念性の一事例といえるなら、こうした観念性は工学技術と生活との間にもあった関係

なのではないだろうか。

4 発表では、こうした見取り図から、情報・生命・環境などの、今問われている領域がどのような来歴をもって近代日本で成立したかを、「感性」と関わらせて論じたい。